

年 ころし

本所區 茅場尋常小學校

第三學年女 加 瀬 孝 子

まめまきの日に大豆を買つて内ですべて一番はじめに豆をまきました。それは七時頃でした。内ではわかいしゆがまいたのです。はじめはおみせへいつて大きな聲でふくは内へおには外といつて、なんどはおぶつだんへいつていひましたもう外でもそこここに聞えます。それから私はまもなく龜井戸へゆきました。

すると、おにのおめんをかぶつた男の人が出てきました。どこかでまめをまきましたらあたまをかへてにげるまねをしました。そこにゐた人々はおなかをかへてわらひました。それからそこいらを見ながらかへつてきました。すこしべんきやうをしてねえさんたちの所へゆきましたら、わかいしゆがおさけをのみながらうたをうたつたり、なにはぶしをしたりしてゐました。あかんぼの方を見ますとわらつてゐました。私はとこの中へはいつてこのつづりかたをかかうとおもひながらねました。

大地震と大火事

本所區 綠尋常小學校

第三學年男 宮 野 常 吉 (十年)

私が學校からかへつてきてごはんをたべた。そしてとなりの家へいつて友だちと本を見てゐると急に大地震が來ました。ぼくは外へとび出して皆といつしよにてつかんの上のところがつてゐると地震がますます大きくなりました。方々の人は皆まつさをな顔をしてゐました。まもなく地震がやむと方々の家は大ていつぶれたりかはらが皆おちたりしてゐました。お父さんはいそいで工場からかけて來ました。まもなくする中に四方から火事をはじめつて來ました。方々の人は火事だといつてさげんでゐます。お父さんが車をもつてきてまづふとんをつんでから私たちのよい着物も車につんでひふくしやうあとへひなんしました。廣い野原も人と荷物でいつぱいになつてしまひました。私と兄さんが荷物のばんをしてゐました。お父さんが二度目の車をひいてきて荷物をあろしてしばらく荷物の上にあると火がひふくしやうあとのまわり一面にまいてきました。お父さんやお母さんがもつとおくの方へにげませうといつてなかの方へ

本所區

三七七

ゆくとまもなくする内につむじかぜがおこつてきました。ぼくは地面の上になつておぼしてゐると、そこに水たまりがありましたからその中へころがると。ぼくのせなかの上をおとなの人があついでいといつてにげていきます。あたりをみるとれんがは雨のやうにとんでとたん板は紙をまいたやうにとんできます。ぼくのあたまの上を火柱がぐる／＼まはつてゐます。その内ぼくの上を人が三四人のつてきました。ぼくは水をからだにかけてしのいでゐるとどこかの人がぼくのからだやきんじよの人に水をかけてくれました。そうして夜があけるまでまつてゐました。

その中にお父さんが水をとりにいつて、それぎりどこかへいつてしまひました。ぼくはお父さんの名をよんで夜があけるまでまつてゐました。そのうちに日ははや東の空へのぼつて来ました。お母さんがこは水たまりでつめたいからといつてかはいたところへいくと皆そこいら中いつばい人が死んでゐました。ぼくはぬれた着物をはかしてゐると、そこへお父さんが来てぼくの名をよびました。ぼくはうれしくて／＼たまりませんでした。お母さんや兄さんやぼくはお父さんのあとへついていつて安田ていの山の上でつかれきつたからだをやすめてゐると、どこかの人がつなみがきますといつてどなつてゐましたからこれはまたかといつて休むまもなく市川の方をさしてに

げますとちゆう江東橋がおちてゐました。ぼくはやう／＼その橋げたをわたつてかめゐどから汽車にのつて市川へにげてしまひました。

やけあとの學校

本所區 綠町尋常小學校 出るも聞るも
第三學年女 佐野 壽美子 (十一歳)

私が學校へ来た時はまだばらつくは出来てをりません。机もこしかけも何もありませんかられんぐわをだいにしてしづいたをわたして机としれんぐわをつんでそれにこしをかけてべんきやうをしてゐます。はじめはお友だちもすくなかつたのがだん／＼たつ内におほぜいになりました。その内にてんとも出来るやうになりました。それですてんの中であつてべんきやうをしてゐるときすゐどうから水が出て水だらけになつたこともありました。又風が吹いた時とがひつくりかへりそうになつて大きなてんとに一年から六年まではいつた事もありました。だん／＼とべんきやうをする内に學校のばらつくは出来上りました。そうして今はそのりつばなばらつくで一生涯けんめいになんきやうしてゐます。机もこしかけもよいのをつかつてゐます。

九月一日のしんさい

本所區 本横尋常小學校

第三學年男 猪瀬健夫

僕の家がたたくみちみちとうござりました。かはらもふるしつちもふる。どうしよう、しようもないのでぼくが外へ行かうとすると、おかあさんがあはてないでちつとしてぢしんがやんだら外へ行きなさいといはれました。ぢしんがやんだので外へ行かうとするとゆりかへしがきて、にかいのかべをおとすからはしらにつかまつておました。

するとおまはりさんが外へみんなでたかといつてまはつてきた。それがぼくの耳にはいつた、するとおかあさんが外へでやうといひましたからでました。出ると間もなくきんじよに火事が出たのでおかあさんが革工場へ行きましたから、ぼくもあとから行きました。ふりかへつてみるとぼくの家はくろけむりにまかれて今にも火がつきさうになつておました。「おかあさんぼくの家はだめですか」といひましたら、「もうだめだからあきらめなさい」といひました。そのうち風むきがちがつたので、火がぼくら

のゐる方へきたので革工場の中は大さわぎ、ふとんを水にひやしてあたまへかぶつてにげる者もあります。ぼくは、はをりをかぶつておかあさんと小松川へにげました。小松川のざいがうぐんじんに、にぎりめしをいたゞいて小松川で一晩夜をあかしました。それから千住へいつてやつかいになつて國へかへりました。

大じしん

本所區 本横尋常小學校

第三學年女 岡田ミヨ

大ぢしんと大火事がすんだのち、九月十九日にばらつくをたて、十月十八日にはじめて學校へきました。

まだその時分はろてんでべんきやうをしておました。十二月ごろはじめて、ばらつくへ入りました。ろてんは寒くてばらつくは暖かくて雨が降つてもやすみではありませぬのでどんなにうれしかつたでせう。

そのうちまた今度りつばな美しいお教室に入ることができてうれしくてうれしくてたまりませんでした。

この教室はすとうぶがあつて、あさはみんな暖かになつてゐて、雨が降つてもちつともつらいことはありません。

まんとのこと

本所區 外手町尋常小學校

第三學年男

宇野良一 (十歲)

いつか私の弟が「となりのかつちゃんがまんと買つたからあたいにも買つておくれよ」といひました。おかあさんが「來年買つて上る」といつたらよるこんではねまはりました。

來年といふ事を知らないからです。

それから十日ばかりたつと學校でまんとのおくびきがありました。それを私があてゝきました家にかへつてさつそくきて見るとみぢかいので弟にやりました。或寒い朝私がそれをきて行かうとすると弟は「あたいのだい」とおほいばりです。

九月一日

本所區 外手尋常小學校

第三學年女

中川和子 (十歲)

大正十二年九月一日午前十一時五十八分と言ふ時間は、私たちの一生わすれる事の出來ない時で御ざいます。今日は夏休もすんでしばらくぶりでなつかしい學校へ行き皆さんにお目にかゝつて、夏休みにあつた面白かつた話などをして、家にかへつて庭であそんでゐると、急にみしみしと動き出しました。私はいそいで何もおちてこない所に出て、そこにすわつてしまひました。其の中にお母様や大がいの人が出てきて、早くしづまるやうにと神様におねがひして居りますと、火事だ／＼とさわぎ出しましたので、私はこはくしてぶる／＼ふるへて居りましたけれど、おしんはたえず、あるのどうする事もできず、たゞすわつて居りましたが火のいきほひはますます／＼つよく見えてゐる中に早や學校へもえつきました。「もうだめだ早くにげろ」とお父様が大きなこゑであつしやいましたので、私は青年さんにおぶさつてばんばの家へにげましたが、そこもあぶなくなつたので向島の家へ行く事にしました。其の時はこはくして／＼たま

本所區

三八三

りませんでした。皆が荷物をせをつて其所此所ににげまどふて、道は大そうなこんざつでありましたが、やつとの事で向島につきました。其の夜は火事もまずく、ひどく其の上〇〇人さわぎがあつて、生た心地もしませんでした。あのにぎやかだつた大東京も焼野原となつてしまひました。私たちはそれでも一番しあはせであつたのでございます。お話をうかゞひますと、水の中で夜を明した方や、又火のために死んでしまつたおきのどくな方がたくさんあつたさうでございます。私たちも心をいれかへて、もつとしつかりべんきやうして、早くもとよりもにぎやかな東京にしたいと思つて居ります。

こはかつたぢしんと火事

本所區 業平尋常小學校

第三學年男

松本 東男

去年の九月一日に學校からかへつてお晝ご飯をすまして皆で二かひに上つてすゞんでゐると家がぐらぐらとゆるぎだした。皆がぢしんだといふので外へとびだした。ぢしんはだんだん強くなつてかはらの落ちる音、家のたほれる音はものすごいやうであ

る子供のなくこゑやたすけてくれといふこゑもきこへた。そのうちに向ひ合の家は三十軒おそろしい音をしてたほれた。私のうちもだいたいぶまがつた。おとうさんが中々かへつて来ないので皆んなでしんばいしてゐたら、そのうちにかへつて来て「もう火がすぐ来るからしたくしてにげなければいけない」といつた。その中にばらばらと火の子がとんで来るあたりはけむりでまつくらになつた。

電車通りへにげだすと、人が一ぱいでもみあつたからみんなばらになつたので名をよびながらにげた。

それから神明様のはへ出ですこし休んでゐたが、とたんや紙がとんで来て心ばいでならなかつた。そこもあぶないといふのであづま町小村井のあづまがらすといふがらす玉場へひなんしていつた。

雪の日

本所區 業平尋常小學校

第三學年女

高野 春代

今日おきて見たら雪がどんどんふつてゐた、うちのあかさんが「まだねていらつ

「いやい」と言つた。
 私はそれでもおきた、そしておみせへいつて見たらまだ近所はねてゐた、雪はだんだんふつてきてだん／＼こつぶになつてきた、雪はふつてくるばかりだ、私がごはんをいただいてゐるうちにすこしもつた、人が通らない所はまつしろだ、人が通る所は水のやうになつてゐる、すこしたつと近所の家はみなおきた。
 となりのもちがしやの子はうちの中でさわいでゐる、私は今何をしてゐるのかしらと思つた。男の子はおもてへ出てあそんでゐる弟はおもてへ出やうとしたらこう言はれた「おもてへでるんぢやないよころぶから」「はい」と言つた外はにぎやかになつてきた。

九月一日を思ひ出して

本所區 小梅尋常小學校

第三學年男 酒井清 一

それは去年の九月一日のことである。ぼくが學校からかへつて来て、ごはんをいたゞかうと思ふと、ぐらぐらとゆれて來ました。はじめはなんとも思ひませんでした。だんだんはげしくなつて来て、今にも家がつぶれさうになつて來たので、あわてて裏へにげました。そして地しんがをさまつてから土手へ見に行きますと、どこもここも皆火の海。川一へで小松の宮様のやけおちるところ、十二かいのやけるところ、とても大へん。やけどをした人がにげて來る。川へおちた人が流れて來る。おそろしいおそろしいわすれることの出來ない九月一日。たつた一夜で東京中をはいにしてしまつた。

大きな地震

本所區 小梅尋常小學校

第三學年女 水城スミダ

九月一日は大地しんや、大火事がおこりました。私はその時ごはんをいただいでゐました。おどろいてねえさんやうちの人やいろいろの人と土手ににげました。土手にゐると十二かいがえんとつのやうにけむりがでてゐました。私はこのあとどうなるかと思つてゐました。そのうちみんなにもつを土手に出しました。まるで夜見せのやうに。そのうちに又だんだんとあつくなつてしまひました。風がふうつと來ると、やけ

どをするやうにあつくなつてしまひました。私はおかあさんに手を引かれてはげました。みめぐり様の鳥居を目がけて、すみ田川の中へとはいりました。すると、どぶくどくと人が流れて來ます。私はなんてかはいさうなのでせうと思ひました。その中に赤井さんがもえる時に二度もつむぢ風が來ました。赤井さんがもえきつてしまふと……こんどは向かしがもえます。その火にあふられて、あつくてあつくてたまりませんから水をかけてもらひました。その火事で二度も水の中へはいりましたが命だけはたすかりました。

七んさい霊

本所區 柳元尋常小學校

大正十二年九月三日この日は夏休みがすんだ後の日です。午前中は第二學期の始業式があつました。小学校の宮澤の先生が、十二歳のやせうな……へほかまをぬいでお母様にあいさつすると、心間もなぐさうつとする音と同時に、あつそろしい大地しんでお母様のひざにつかまつて居ると、がらりと大きな音と共に

に私の生れた家はつぶれました。さいはひにけがもせず、近所のお寺にひなををました。

本所區 柳元尋常小學校

何度も何度も地しんがきます。私は兄さんが見えないのでしんぱいでたまりません。見る／＼うちに天にはまつ黒なけむりが立ち上り、お日様はまつかになりました。

風が強くなつて火の子がたくさん飛んで來ます。其のうち兄さんやお父さんが見えなのであえしんし、お母様とかめおどの方へにげました。ふりかへると家はもうけむりにまかれて見えません。大切な物が入つてゐるまゝやけてゐることです。私はつぶれた家の屋根やがかはらの上をあるいて、人におされてかめお戸へにげました。氣がついて見ると又兄さんやお父さんが見えせん。あまりかなしいのでなみだが出ませんでした。火はこゝまできそうです。私は兄さんがたにあへるやうに中川のへりに行きました。こゝまでおんせつな玉場の方々と野じゆくをしてゐると、夜中にかねがなる、たいこをうつてピストルの音、ときのことゑ『○○人だ。』と言ふことゑにびつくりして、其の工場のおにかへにはげこみました。まつくらの中でいきをころして居ると、どなたか『なむあみだぶつ。』と言つて居ります。お母様も小さいことゑを神様やほとけ様にい

のつて居ります。〇〇人にころされるならしたをかねて死にませうと皆様がきめま
した。南から西はまつかです。東京市がもえつくすやうです。
二日野じゆくをして、三日目にやつと兄さんがたにあひました。うれしいやらかな
しいやらで一度になみだが出ました。

おなかにしんるいのない私の家ではずいぶん心ぼそくなりました。
二日目東の空が白くなつた時下を見ると兵たいさんが大ぜいきて居りました。私ど
もは皆よろこびあひました。

三日つていふものは食をいただかなかつたのでつかれてしまひ足をひきづりく
なりの村のしらないうちへいつてひなんをしました。ひふくじやうは何萬人といふ人
がなくなりました。

私どもは少しもけがもせずにしやはせであつたと思します。

バラツク

本所區 柳元尋常小學校
第三學年男 玉井 實(十一歳)

今朝はぼくどもはバラツクの中でべんきやうすることになりました。學校のバラツ
クがせまいので、やけどされの人にどいてもらつて、其所でべんきやうすることにな
りました。みんながなんだかくさいといつてゐました。じぶんもほんとうにくさくな
りました。先生がそれはしようどくのくすりだといひますが、まだくさいきもちがし
ました。

あちらのバラツクにくらべるとガラスまどがないから、暗くて先生の方がよく見え
ません。電とうを六つつけたら、やうやく見えるやうになりました。みんなが、夜學
校のやうだと笑ひました。それでもがまんしていつしやうけんめにべんきやうをし
てゐます。

九月一日の大震災

本所區 三笠尋常小學校
第三學年男 笠井 隆 助

大正十二年九月一日は一生わすれることはできません。思ひ出せば涙のなね、時は
午前十一時五十八分に大地震にて家はたふれ、同時に火事となつた。いちじ母を見つ

けて御假屋公園へ行くと、一ばん上の兄にはれ、僕は兄と二人で母をみつげながら、おかりやへ行く道はもう火で一ぱいだつた。僕は見ともどつて、かどの料理屋のところへくると、隣のおぢさんが母は中村の邸のにはゐるときいて、いそいでそこへ行つて見ると母は池の岸にゐた。しばらくたつと一番上の兄も僕たちのゐるところへきた。そこへ一時間ほどたつと、火は中村の邸のには近づいたので僕は母兄弟と共に被服廠の跡へのがれた。午後三時ごろあの廣い被服廠の原もやみとなつて、つむじ風は吹く。火は四方八方より來り、兄や母や長屋の人々僕等兄弟は、吹きまくられて、はなればなれになり場内はみだれ、さげび聲や、もがきくるしむこゑでみち、中にもおがむ人あり、多くまたばた／＼死ぬ。そのうちに僕は一番上の兄さんとあつた、兄さんの左の手からは血がどん／＼でる、右の方の目は、つぶれたかと思ふほど血がたまつてゐた。十二時間も被服廠の中でにげまはり、あけがたの三時頃、川岸にきてのどを川の水ですすぎ、でんしん柱のたふれた所に、こしをかけてゐた、すると間もなく、すぐ上の兄とあつた。その時の僕のよろこびはこの上もなかつた。あかるくなつて、被服廠に母をたづねに行つた。母は悲惨の焼死をしてゐました。僕のうちの父は七月十六日に死んで母と三番目の兄は九月一日に死にました。僕のうちでは一番上

の兄さんと、二番目の兄さんと、四番目の兄さんと、すぐ上の姉さんと、僕と五人になつてしまひました。一時は親子八人でしたけれども今では五人です。僕は父母や兄の死んだことを思ひ出してはさびしくかんじます。おそろしかつた大震災

本所區 三笠尋常小學校

第三學年女 木村 みよ

ちやうど私は學校からかへつて、お父さんのお使ひでかどの酒屋へ行つてゐる時でした。皆が地震だ／＼といつて大さわぎ家がぎい／＼ゆれて、たなにあるものがた／＼あちる。そのうちに大きなひびきと同時に家はたふれ、私はつぶされて、目にはごみ、足からは血が出るし、それをいいたいとは思ひませんでした。そのうちに人々はあかじだ／＼といふ聲が私の耳へはこりましたから、いたいのもわすれて、つぶれたところをこらへて、うちへかへつて見たらお父さんはおませんでした。私はまたこうばんのところへ行つてやうとお父さんにあひましましたから、一七まに岩崎公園へにげました。そのうちにつむじかぜにあつてまき上げられ、橋の川におちて大にた

おしんのはなし

本所區 太平尋常小學校

第三學年男

渡邊 清 (十歳)

私はおしんの時、おつくりしました。その時、私はおきやくさまにつれていつても
ちいまたので、おとうさんたちはしんぱいしました。はだしでにげましたので、け
たをとりにかへちましたら、おとうさんが、おまへはどこにゐるのかといひましたの
で、革こうばの中にいるのです。と、こたへましたあと、おはあさんがききましたの
で、いつしやうににげました。こんどは、革こうばにも火がつかましたからみんな小
松川にげてたすかりました。

一日 十月十五日

私のうち

本所區 太平尋常小學校

第三學年女

土倉 照子 (十二歳)

やけた前のうちより、今のうちのほうがはらうございます。せんのうちによその人

がきてもちがちひさひからねられませんでした。が、火事からこつちはたいそうひろく
なりました。それで私たちがあそぶのにもひろくてようございます。それに日あたり
もよくていいところもちです。あたらしいうちもはきもちがようございます。

学校のごはん

本所區 太平尋常小學校

第三學年女

日野 あい (十歳)

私は一日おきに學校でごはんをたべさせていたります。そして、おちゆうをたべさ
せてくださいます。わたくしはしちゆうがまきです。そのしちゆうの中のにんじんが
きらひです。けれど、にんじんはくすりです。だから、おんしてたべてしまひます。私はか
じまへはからだがよわかつたけれど、このごろはからだがいやうぶになりました。

ばらつくはさむいからみんなふるえておます。どこをみてもとたんやねばかりです。まはりを見てもとたんでこぼるたがたいいぬつてあります。私のうちもとたんやねです。だからちよつとのあめでもばたばたと大あめのやうにおとがします。元わた所はまだひどいちよつとの風でもがたがたといつてよるねるときかぜがふくと内の戸をあけたのかと思つておきるとなりの内の人がじぶんの内の戸をあけるのでした。だからうるさくてねむれません。去年の八月頃はやけないから長屋がたくさんありましたが今は長屋がありません。それでこくぎかんなんてあんなかぬみたいたのでこさいたのもみんなやけてくろくなつてしまひました。こくぎかんのはひる所にわたされいなさんぎよやひごひもしんだらう兩國橋なんてあんなじやうぶなのもみんなこはれてしまひました。

私どもの學校

本所區 太平尋常小學校
第三學年女 稻生 蝶子 (十一歳)
私どもは何としあはせなことでございませう。焼け出されては學校もなかくはぢ

まるまいと思つたよりもはやくはじまつたのでよろこびました。それで學校へはじめできたときはうれしくてなみだがこぼれました。せんせいみんななぶじであつたことも安心しました。そのご學校で一日おきにおひるのことはんをぢさうになるやうになりました。にくだのさかなだのおなやだいてんやそのほかいろくです。ばんのときもありますがいつでもおいしいものをいたゞきますから私は學校へくるのが何よりたのしみです。私どもは何てしあはせでございませう。

僕の家

深川區 深川尋常小學校
第三學年男 川上 吉次
今僕の家は深川學校あとのバラックはの十號です。

僕が一年の頃はほんごうまさご町十番地でおでん屋をして居ました。所が内のお父さんの兄さんが病氣になつてしまつたので内のお父さんが毎日その兄さんの内へ見まいにいつて居たのです。その兄さんの内は本所でしたので見まいに行くのにとういの

で安宅町七番地へこして飯屋を開きました。新大橋が出来た後かいせいどうろの安宅町三番地へこしやはり飯屋をしておりました。それからお父さんが病氣になつたり僕の見さんが病氣になつたりしてとても飯屋のやうないそがしい商ばいはできないというのでそこをやめて西天間堀三十六番地へこして魚屋をしました。

此の商ばいがうまくいつてらくにくらしてをる中に九月一日の大震災にあつて家もお金もたんすも魚も皆やけたので今のバラックへおせわになりました。屋根はすぎかはですからひどく雨がふるときには三四所もります。その上北むきで朝になつても夕方になつてもちつとも日があたりません。

前の内を見るとうらやましうございます。それで僕のいもうとなどは寒いのであんかにあたつてゐます。それから、しやうじがなく、戸ですから雨ふりにはくらくてこまります。廣さは六じやうです。

家にある物はねずみよけに、よとんが七枚あります、それははいきゆうでいただいたのが三枚いなかでいたゞいたのが二枚内でこしらへたのが二枚です。僕の内には四十二のお父さんと三十九のお母さんと十五の兄さんそれから十二の僕と八つと五つと三つの弟と妹でみんなで七人です。

お父さんは毎朝よくしたくをして工場へ出かけます。今度は「つなみが来ても地震が来ても大丈夫な山の手の方へこそうと思ふ。」とお父さんが言ひました。

おそろしかつた地震

深川區 深川尋常小學校

第三學年女 金子セキ

ちやうどあの大地震はお晝ごろでした。私のうちはお晝のごはんをたべやうとした時あの大地震でした。私ははじめぐらくとうごき出した時すぐ外へとびだしました。私のうちはお晝ですが、おかあさんはいもうとと弟をつれてたんすの前です。しすくんでゐて地震がしすまつてから外へでました。その時ちやうどお父さんはお寺まわりであるすでした。外で少しまつてゐると、お父さんはかまもはありもいつしよにかかへてたびはだしになつてかけてかへつてきました。それから店のはんてんをきてかわらの下から車をほりだしてうち中の大切な物を車につみました。途中まで持出ました荷物があつては私たちがかわいそうだと荷物をすてて私たちをつれてにげ

てくれました。それからして岩崎公園へはiri月島へにげました。それから三日までごはんをいただくこともできず、つかんの中でのじくをしまして三日目に船でやけあとへかへつてきましたら、たくさんの人が死んでゐました。それを見てきのどくにちもひました。それから田舎へ行つて十一月まで田舎の學校でべんきやうをしてゐまして、もとの學校で先生といつしよにべんきやうのできるやうになつた時ほんとうにうれしく思ひました。こんな人多くの人が死んだ中でさいはい生残りましたからこれからはべんきやうしてはやく元の東京になるやうにと思ひます。

地しんと大火

深川區 東川尋常小學校

第三學年男 海老原政寧

ち九月一日の十二時ごろぼくはざしきのつくえによりかゝつてうとうとしてゐるとそこへぼくの友だちの光ちやんがむかひに來たまもなく光ちやんの兄の勇ちやんが來たぼくが勇ちやんに話かけるとぢしんがぐらぐらゆれ出した。ぼくはうるたへながらそ

ぼのつくえの下へはいろうと思たがもうまがない、ぼくは勇ちやんにかじりついた。光ちやんもかじりついてしまつた、勇ちやんは二人の重みでたほれた。ぼくはそばにあつた木につかまつた。そのうちにぢしんがやんだのでぼくは内の前へ行くとみんなは家の前の板べえのはしらにつかまつて色々のとなへごとをしてゐました。ぼくも一つしよにおきやうをあげてゐました。そのうちになんべんもなんべんも大きなぢしんが來ていつのまにか方方で火事だ火事だといふこえが聞きました。風が吹いて來るとばらばらふるしきづゝみや火のこのかたまりが雨の如くになつてとんで來た。

ぼくはむちゆになつて内中の人と一つしよに大島の方へにげて行きました。まつ赤な火事はどんどんもへてゐた。

火に追はれて

深川區 東川尋常小學校

第三學年女 堀内敏江

あの恐ろしい地震のあつた時私たちは晝の食事をしてゐました。するとごーとい

深川區

四〇三

ふ音がしたかと思ふとゆら／＼と家がうごきました。一年にあがつてゐるふみちやんはこわいといつて姉さんにすがりつきました。みんな顔を青くして姉さんははしをもつたまゝ棒のやうになつてゐます。そのうち少しやんだのでみんな外へとびだすとまたも大きな／＼地震がゆつて電信柱などはたほれさうになります。

私はおつかなくて／＼今にも命がなくなるかと思ひました。そのうち近くから火が出ました、父さんと兄さんは大船にどん／＼家の道具をはこびます。私達は小船に上げてゐました。

火はどん／＼と追つかけて來ます。道具を半分もはこばぬうち火に追いつたてられ追いつたてられ小名木川を下つて行きました。なきさけぶ聲や船にのせるといふ聲で大へんなさわざでした。

三人の姉さんと妹と私は船の中によりかたまつてやう／＼洲崎までにげましたが父さん兄さんの船にはぐれました。

母さんは死んでしまつて三年目、こゝで父さん兄さんが死んだらと思つたら悲しくて／＼しやうがありませんでした。

新川から陸にあがつて砂町へにげました。その夜なか〇〇人が殺しにくるといふはさがあきて朝まで一つもねむらずふる／＼ふるへておりました。

次の日父さん兄さんとあつた時のうれしさはとても云ふことはできません。

東京の大震災

深川区 明治尋常小學校

第三學年男

伊 藤 勝

九月一日の朝、私はとこからいせいよく飛起きて御飯を食べ學校へ行つた。しきがすむと僕等は家へ歸つて御晝御飯を食べてしまふと、だしぬけに家がだた／＼と鳴りだして左右にゆれた。私は御母さんにひきずられながら外へ出た。地震がやんでしばらく外にゐると、もう四方は火にかこまれてゐた。それから岩崎公園へのがれたが皆がつなみがくると言つて大さはぎをしてゐるので、私たちは築山へのぼつた。だが岩崎の日本館がもえてゐるので火のこが雨あられの様に降つてくるのでたまりませんから、海邊橋を渡つて品川の方面へ行かうと思つたが永代橋が焼けてゐるので行くことが出来ません。知らず知らず淺野セメントの方へ行くと、もう目の前まで火が來

たからびくびくしてゐると、さいはひに船があつた。僕は喜んで皆といつしよに船へ乗つた。乗るが早い火はもううつつてきた。僕はほつと一いきついた。船に乗つてゐると「上の方から焼船が流れて来るから、よいいをしてゐないとあぶない。」と船頭が言つてゐる。隅田川の船の中でちやうど二日二晩飲まず食はずにゐた。三日目に日本橋區の方へ下された。それから土州橋を通つて水天宮様のそばをまがり新大橋を渡つて森下の四つ角へ出て龜澤町から龜戸へ行くとちゆう江東橋を工兵が無数の死人の浮んでゐる川に假橋をかけてゐた。その假橋を渡つて龜戸の方へ行つた。ていしや場に行つて見ると、人ごみがえらいのでとても汽車に乗れません。それでたんぼうの家へ行つて二晩とめてもらつた。

一晩目は何だか地震が又來はしないかと思つて心配がたえなかつた。二晩目は〇〇人が來ると言ふさはぎで夜も眠むられなかつた。三日目の朝五時頃に龜戸のていしや場から汽車で中山まで乗つた。中山のえきまで行くと兵士がけんつきでつぼうをつき出してゐるので私はびつくりした。それから中山法華經寺で二晩とまつて八幡のあき家へ行つた。そこへ内の所化僧が來て「巢鴨のをばの家へいらつしやい」と言つたの

で、したくをして八幡のえきまで來ると、ゐなかからいとこが迎へに來たので、いつしよにをばの家へ行つた。そしてながい間やつかいになつてゐた。だが震災のことを思ひだすとまだいゝが、前の家が菓子屋だから食べたくて食べたくなかつた。十日程たつて、いとこといつしよにゐなかへ行つた。その時は、御母さんがよちちようまで見送つてくれた。そして「からだを丈夫にしなよ」とおつしやつた。大つか驛から、しんじくまで、しよせんへ乗つて、そこから汽車で名古屋まで行つた。そのとちう、よせと上の原といふえきの間を十五町程歩いた。この二つのえきの間は一つとんねるがくづれてたのであつた。それからはどこも歩まず、ぶじに名古屋へついた。ゐなかに居てもながい間居る中に、どうしても故郷がこひしくてたまらなかつたので一月になるとすぐ東京のやけあとへ歸つた。

大地震の思ひで

「あの地震の思ひで、深川區、明治尋常小學校、木村、富次郎」

ぼくはおひるのごはんをたべてから、にかいに上つた。あんまりあついで着物をぬいだ。たんすの所へよつかゝつておたらとつぜん家がぐら／＼とゆれはじめた。「あつ」とおどろいて、はしごだんの方へ行かうとしたが、波にゆられてゐるやうでなか／＼行かれない。かべは落ちる。たんすはたふれる、ぼくはほんぶんなきがほだつた。そのうちに、にいさんが上つて来て、ぼくを横ちよにかゝへて、はしごだんまできたが「あつ」といふまに下へおつちてしまつた。ぼくが下のたんすの所へくると、女中がないてゐた。

みんなうちのお寺の前へ出た。寺のいんきよさんが白いゆかたをきて血だらけになつてゐた。そばにぼうさんがをさへてゐた。まるでゆうれいのやうだつた。だん／＼火の手が近くなつて來たので、にげだしたら運悪く、内の者とはぐれてしまつた。となりのくづ屋さんとにげだした。萬年町の所へ來ると、じやうしん寺のうらから火がちら／＼と上りはじめた。空は煙で一ぱいだ。明治小學校の裏から火が上つた。黒龜橋の所へ來ると、明治小學校へ火がついた。あゝ僕等の學校は今焼けてゐる、僕は何とも言へないさもちで、胸がいつぱいになつた。辰己劇場はぼん／＼火のこをとぼしてゐる。くづ屋のをばさんが越中島へにげ

やうといひだした。越中島へいくと商船學校はさかんにもえてゐた。水産講所ももえてゐた。ぼくたちはまるでひばちの中のすみのやうだつた。

二日の朝くづ屋さんは親るいの人とあつた。三日の日電車通りへ出た。黒船橋の所へ來るとおぢいさんとにいさんがゐた。ぼくはその時ずいぶんうれしかつた。みんなで一しよに行くと、あちこちに死人はたふれてゐる。電線はだらんとたれてゐる。

ぼくの家の所へ來て見ると、たゞのこるは焼がはらとはいばかりだ、はいの中へ手をあれるとまだあたゝかつた。あゝぼくの家は焼けてしまつた。なんだかゆめのやうでしやうがない。

九月一日の大震災

深川区 東陽尋常小學校

第三學年男 上野 博

九月一日に夏休みがすんで學校でしきがありました。僕は學校から十時頃に家にかへりました。此の日は大そう暖い目でしたから僕はじばん一枚でゐました。すると晝の十一時頃に大地震があつて僕の家の中はまるでけむりがでたやうにほこりが立ち

ました。お父さんはしごとを休んだ日でした。お父さんは外へ出よと言つてみんなを外を出しました。そしてお母さんと二人で家の中の荷物を取り出しました。まもなく其所此所に火事だ々々と言ふこゑがしたのでうちぢうが一しよににげました。さいはいにおぢいさんがたづねてゐた時一しよにあつた。おばあさんやおぢいさんと一しよに千田町の學校へにげました。夕方になると亦この學校も火事になつたので學校を出て行くと川があつて橋を渡らうとすると橋が落ちてをたから船で川を渡りました。そこで皆が別れ／＼になつた。砂村の學校で皆があつた時はうれしくて／＼てたまりませんでした。火事がやんでから、につぼりに行きました。そのていしやばは人でいつばいで通れないから此所はだめだと云つてたばたで汽車にのつて田舎へ行きました。

地震と火事

深川區 東陽尋常小學校

第三學年女

竹野 シズ

九月一日に私はお友だちと内であそんでおましたら急に大ぢしんがゆれました。そちしたら、ほうほうの内がつぶれてしまひました。私の内もつぶされてしまつたので

びつくりしました。すこしたつてから、地震がとまりましたからやねからはい出しました。でて見るとあちらからもこちらからも火事をはじめました。そして私はいそいでおとなりの人とうめたてちへにげやうとしたら、よその人たちがつなみがくるといつてみんな歸つて來ましたから八幡様へにげました。そしたらすぐ八幡様の前の方も火事になりました。その時、私の家ももうもえてしまつたでせうと思ひながらこんどはほうせいくわんへにげて休んでゐますと、兄さんが來ました。そこでお禮をいつて兄さんとうめたてちへ、父母をさがしに行きました。うめたてちに、にもつといつしよにみんながゐましたので大そううれしうございました。夕方になると火のこがたくさんきましたので又ひかう場へにげました。見てゐるとそこへぼんぶがきました。なか／＼あつくておられませんか、はしをこえて川向ふへにげました。夜になると〇〇じんがくるといふので、ねられませんでした。あくる朝になると方々でいろ／＼の物をひろつてやう／＼おなかをこしらへました。ここで四日すごしてゐなかのしんるいへ行きました、思ひ出してもふるえます。

了りつた

深川區 六間尋常小學校

しゃぼんだま

深川區 六間堀尋常小學校

第三學年女 中村 須磨

(一) ぼつくり／＼しゃぼんだま

くるくるまはつて

さへちやつた。

(二) ぼつくり／＼しゃぼんだま

赤や黄色がまざつてゐる

くる／＼まはつて

さへちやつた

吹雪の夜

深川區 六間堀尋常小學校

第三學年男 竹崎 清

外は風がひゆうつと吹いて雪が知らない中に、

だんだんとつもつて行きます。

物さびしいバラック町の夜しんとして人の聲はちつとも聞えませぬ。たゞごうごう

と吹雪の音ばかりです。人の聲でも吹雪のためにかきけされてしまつたのでせう。

焼け残りのみきばかりの木や枝ばかりの木は吹雪に吹かれて面白い音を出してゐま

す。

人は家の中でこたつにあたつてをります。こんな晩には犬も外へ出ないでせう。

吹雪はだんだんと強くなつてちつともやむやうすもありません。

夜は次第次第にふけていつてさびしくさびしくなつて行きます。ようよう夜明方に

なつて空が晴れてきて雪かやみました。いつでもバラックは寒いのに吹雪の晩は一そ

う寒い。

大地震大火事

深川區 扇橋小學校

第三學年男 岩崎 鼎

僕は九月一日の朝學校へ行きました。學校の始業式が終つてから家へかへりました。晝のごはんをたべようとするとあの大きな大地震が來ました。僕はうちの者より一番早く出ました。その日ちやうど四谷のおばあさんが來ました。すこしたつて又大地震がうなつてひゆう／＼音をさせて來ました。おばあさんはお病者ではないから大地震が來たときでもをどろきませんでした。だん／＼晩になると今度は大火事になりました。家中の者が舟にのつてしんかい橋までにげてくるとなりの舟に火がついて來ました。家の者が道に出てそれからどん／＼／＼にげる中に火のこがはら／＼とをちてくるので僕は死にそうな氣持になりました。

やけあと

深川區 扇橋小學校 第三學年女 若月キサヨ
 私はやけあとへへ／＼かへつたら／＼人の氣がさ／＼と聞かされた。式もさ／＼と風がブツ／＼／＼吹いてゐた。元の家をそばで／＼大工が／＼／＼

とんとことんと

ぢしん

深川區 臨海尋常小學校 第三學年男 井上公男

九月一日にぼくは學校からかへつて來てかつどうへいかうと思つてはばかりにはいりました。そしてはばかりから出ると、内のお父さんがかいしやからかへつて來られました。ごはんをたべやうとした時あのこはいぢしんがゆれました。しばらくじつとしてゐますとぢしんはちよつとやみましたからそとへとび出すとかはらがいつぱいです。さんじよを見るともうたほれてしまつた内もありました。早く電車通りへ出て見ますときうに來たぢしんのことですからびつくりしてきちがひやばかになつたかはいさうな人もありました。やんではゆれ／＼してゐますうちにやがてすさきの方面ではかじでさはぎ出しました。そのかじも又こちらの方へそれからそれへとつ／＼て來ますのでエイタイバシへにげました。するとエイタイバシむかうでも、もう大かじになつたのでみんながさばいでかへつて來ます。そのうちにゆう方になりましたから天

りしました。今まで居た越中島のバラックとはずいぶんちがひです。あそこはくらくて、せまくて、さむくて、ひざの上や人のおせ中で書取をしたり、晝をかいたりしたのです。此の間のあらしには、ゆかまで水が上りました。

今たつた一つかなしいのは、うんどうばがせまいから、あそび時間に外へ出て思ふやうにとびまはれないことです。

ふしぎに助かつた私

深川區 元加賀尋常小學校

第三學年男

石井三紀夫

學校の歸りに大地しんにあひました。私は其の時よその家へ入らうと思ひましたがあぶないと思ひ、そこへ入らず元加賀學校運動場へかけこんで門のそばにじやりがはいつてゐるおけにつかまつてゐました、大地しんもやみ出すと、すぐにゆれかへしが來ましたが私はくはばら〜と神にいのりました。其の時前の家がつぶれてしまひました。そこへはいらなないでああよかつたと思ひました。其の晩の大火事で町は皆焼けてしまひました。火につまされたり、にげかねたりして死んだ人が數へきれん程あり

ました。何もかも焼けちやつてありません。私は何のけがもなく、運よく助りました。家内十一人とも助りました。私は焼け出されて着物も食べる物もなかつた。この事を聞いて日本國中の人々はたくさん品物を送つて下さいました、又遠い外國の方々からまで義捐金をつのりこれを送つて下さいました。今では學校も出來て何も不自由なく勉強する事が出來ますしかしお父さんは「もうことばかり考へてゐられない。」といつて、兄さんといつしやうけんめいに、よく働いて不自由なものをかつてくれます。

元のがく校にかへるまで

深川區 元加賀尋常小學校

第三學年女

石野サイ

去年の九月一日、私は學校から級長のおめんじやうをいただいて家へかへりました。お父さんは大そうよろこんで、ほめて下さいました。私もうれしくニコ〜としてあそびに行きました。したら大ぢしんがゆつたのでびつくりして、前の小間物やさんへとびこみました。こま物やさんのおばさんは、私をおしいれに入れて下さいました。

新しい學校

深川區 數矢尋常小學校

第三學年女

畔野 榮子

十五日の朝でした。先生が今日は平久町の學校へおひつこしですとおつしやいました。皆さんは手をうつてよろこびました。さつそくしたくをしてつくゑやいすを持つて出かけました。まるでつくゑのぎやうれつでした。

新しい學校は廣くおぼが、いくつもあるのです、まいごになりそうです。私の教しつは一番南の角で日が一ぱいはいつて暖かです。てんじやうもつくゑもぜんぶ新しいので氣持がよろこびます。こちらの學校へこしてからは皆さんがよくべんきやうします。私もいつしやうけんめいべんきやうして九月中あそんだ分を取かへすつもりです。

やけぼつくい

深川區 八名川尋常小學校

第三學年男

早崎 幸吉

せんは青青してたけど

今はきたない くらんぼだ

どうしてそんなにくろいのか

だまつてくろいやけぼつくい

ポストクン

どうして何時までうごかない

あなかでもいたいのか

あめがふつても、うごかない

私の先生

深川區 八名川尋常小學校

第三學年女

山王堂 静子

私は三年の初めから比佐先生に教へていたゞきました。

深川區

去年の九月一日の大地震で、私のお家も私の学校もみなやけてしばらくの間は、學校へ行く事も出来ませんでした。

今ではお道具も、先生から戴いて毎日學校へ通つてゐますけれども私どもの先生が學校にゐらつしやらないで、毎日の様に先生の事を思ひだします。道を歩いている時よそのお姉さんを見て先生ではないかと思つていそいでそばへ行つて見るとちがつてゐるのでがっかりした事も度々ありました。

私は先生が早く御歸へりになればよいと毎日思つてゐます。

比佐先生よい先生よ

私たちをかわいがり

ご本や、さんじつていねいに

何時も教へて、下される

地震のお話

深川區 川南尋常小學校

第三學年男

川崎

豊

おかあさんがつくづくかんしんした、それは地震かみなり火事おやじで初は火事があつかなかつたと思つたら去年の地震の方があつかなかつたとおかあさんが言ひました。

おとうさんが、ほんとうだおまへはしはあせだ舟でにげたから火にはあはなかつたのださうだ、おまへはかめいどから三つになる妹をおぶつて上野までにげた、あの時はづいぶんくたびれただらう、あの時は死ぬほどくるしかつたなあ。とおとうさんが言つた時には家がしんとしてしまひました。

おそろしい九月一日

深川區 川南尋常小學校

第三學年女

鈴木

木

學校から歸つて御飯を食べようとすると、大きな地しんが來ましたから、私はびつくりして女中にだかると、女中はうらへ出ました。お母さんたちは表へ出ました。少したつとやみましたからお母さんのところへ行くと、又大きなぢしんが來ると水が出るよとみなが云ひますので、大急で丸太の上へ上つて其の日を明すつもりでした。夜に

なるときうにさるえの方から火がきましたから、にかいへ行つて赤んぼうのきもものを持つてにげて來ました。そして原にゐると、みんながもうこゝはだめだから一しよにかめいどへにげませうと云つておどろかすやうに云ふので、さとちゃんが死ぬ時には一しよに死ぬからもう少しこゝにゐてみませうと云つてそこにゐると大島の方はだんくきへて來ましたから、おゝよかつたと云ひました。氣が付いたのは大島のおばあさんの家でした。おばあさんの家へ行つて見るとおどろきました。

となりまでやけて、おばあさんの家がのこつてゐると云つて中へは入つて見ると、おばあさんも子供もけがはありませんでしたのでほつと安心しました。

大地しん

私のすきなてるちゃんとはかばへ草を取りに行きまして花や草を取つて歸つてくる道で地しんにあつてこまりました。てるちゃんとははくつて石の橋をわたつて、ましたら、向ふからもこつちからも、ほこりてこまりました。せきとうの立つてない所へ

いつてなきながら「なんみやうほうれんげきよ〜」といつておきようをあげ地べたへぎつしりとつかまつてないておりましたら私のお母さんがきて、きみちゃんといつてきてくださいました。その時はうれいともなんともいへませんでした。見てゐるうちにあつちからもこつちからもかばらがおちてきました。しばらく、はかばでひなをしてをりました。そうしてゐるうちにほうほうで火じがはじまりましたのでみなさんがぼつぼつにげました。私のかはいがつてゐるねこをつれてお母様がにげて下さいました。にげる時には一面の火になりました。ずいぶん火の子をあびてあつくてこまりました。それでも私らはいのちにべつぢようもなくにげられてこんなうれしいとはございません。なくなつた方は水で死んだり火で死んだりしてをる方がおほございます。どんなにくるしかつたらうと思ふとかはいさうでなりません。なんと言ふてになつたのでせう。

バラックのおうち

深川區 明治第二尋常小學校
第三學年女 山本 房子

私のうちは

バラックよ

つぶれて

やけて何もない

ほんどに

つまらぬ

うちなのよ。

さびしがる犬

深川區 靈岸尋常小學校

第三學年男

小野 寺鐵雄

ゆふべ、あつかいのかへりに犬がさびしがつて泣いてゐた、去年の火事でひとりぼ
つちになつたのだらう。今夜もきいてゐると、又その犬が泣いてゐる。見ると、

こまつた事

深川區 靈岸尋常小學校

第三學年女

御

チ

ヨ

九月一日學校からかへつてからの事、お父さんが煙草をかつて来てくれといはれま
したから外へ行きました。少し行くとごと／＼地面が動きだしました。おどろいて煙
草を買はないでにげました。方方の方がはだしてあつちへいつたりこつちへいつたり
大さわぎしてゐました。じしんが少しとまりましたので急いで家へかへりました。そ
のうちにすさきから火事が起りました。家の人たちは皆にげました。火はだん／＼あ
とを追ふてきましたので。川の方へにげました。

もうこゝまでは、こないと安心して、その晩は外でねました、あくる日の朝どての
所へこやをこしらへてゐると、あつちこつちから丸太を持つた人が来ておとうさんと
家にいたしよくにんたちをしばつてけいさつにゆきました。そしてあしたかへしてや
るといつてなか／＼かへしてくれませんでした。そのばんはお母さんとにげる時、ひ
ろつた赤ちやんと、家にいた男の子と私と四人でさびしがつてゐました。すると又し

らない男の人が小屋の中へはいつて来てお前等は〇〇の女ではないかといひました。お母さんがさうですといひましたら、ささまらこそすぞといひました。そしておこりました。私はしんばいでなき乍らなんべんもあやまりました。そんなら女の事だからゆるしてやるといつて行きました。よろこんでけいさつにいつてお父さんのいつてゐるならしといふ處へつれていつてもらひました。

お父さんはみんなは死んだと思つてゐましたから、大へんよろこびました。それからみんな東京へ送つてもらいました。

地しんの時

深川區 猿江尋常小學校

第三學年男

木島 新太郎

僕は地しんの時、本をよんで居ました。すると地しんががたがたつとゆれはじめました。

お父さんがしごと場からかへつてきて、入らうとするときふに大きくなつて、僕の妹とお父さんは地しんのためにつぶされました。お母さんが見て居たからよかつたけ

れど、もし見てゐなかつたら死んでしまつたでせう。お母さんがすぐに近所の人をよんで来てたすけていただきました。お父さんと妹はまるでかべの土をかほになすりつけたやうにまつ白になりました。お父さんも妹も近所の人におぶさつて前川病院へ行きました。とちうで水でかほをあらつたら氣がついたので、そのままかへりました。屋根をこはしてだうぐをだしました。けれども火事のためにみんなやいてしまひました。

九月一日

深川區 猿江尋常小學校

第三學年女

安西 千鶴子

私が學校からかへつてきてごはんをいただこうとするにあの大地震、私はおどろいてすぐに外へとびだしました。そうしてしばらくはお寺にひなんをしました。その時ちやうどおかあさんがおつかひに出かけたあとでしたから私はおかあさんがどうなつたかと思つてづいぶんしんばいしました。その日はちやうど大井町のおぢさんの所へ来てゐたのです。私は日本橋の家がしんばいでしんばいでなりませんでした。すると

どこともなく火がもえあがりました。私はもうおかあさんはこの世の人ではないのかと思ひました。その夜のことですおかあさんが兄さんをつれてこのそりやつて來ました。私はうれしくてたまりませんでした。おかあさん日本橋の家はどうなりましたといひますとがっかりしたやうな顔でまるやけだとおつしやいました。私はびつくりしました。荷物を出しましたかとさゝますと一つもだしませんといひました。今ではバラックにすんでおますが、バラックは寒く物はなしほんとうにふじゆうなものです。すきまから風がはいって寒くてくたまりません。私たちはふじゆうなめにあつたりおそろしいめにあひました。ほんとうに大正十二年はおそろしいやな年でありました。

（以下は非常に小さい文字で書かれた文章が続き、内容は読み取れず）

大正十三年八月廿五日印
大正十三年九月一日發

刷行

〔定價金一圓〕

震災記念文集 三尋

著 作 者

東京市役所

印 發 者 兼 刷 行 者

東京市京橋區銀座二ノ一五
株式會社 岡本洋行 出版部

培 風 館

右代表者

山 本 慶 治

〔價 定〕
錢 十 七 (一尋)
錢 廿 圓 一 (四尋)
錢 卅 圓 一 (六尋)
圓 一 (二尋)
錢 廿 圓 一 (五尋)
圓 一 (等高)

發 行 所

東京市京橋區
銀座二ノ一五

培

風

館

電話青山三二六八
振替東京三二六一七

大正十三年八月廿一日

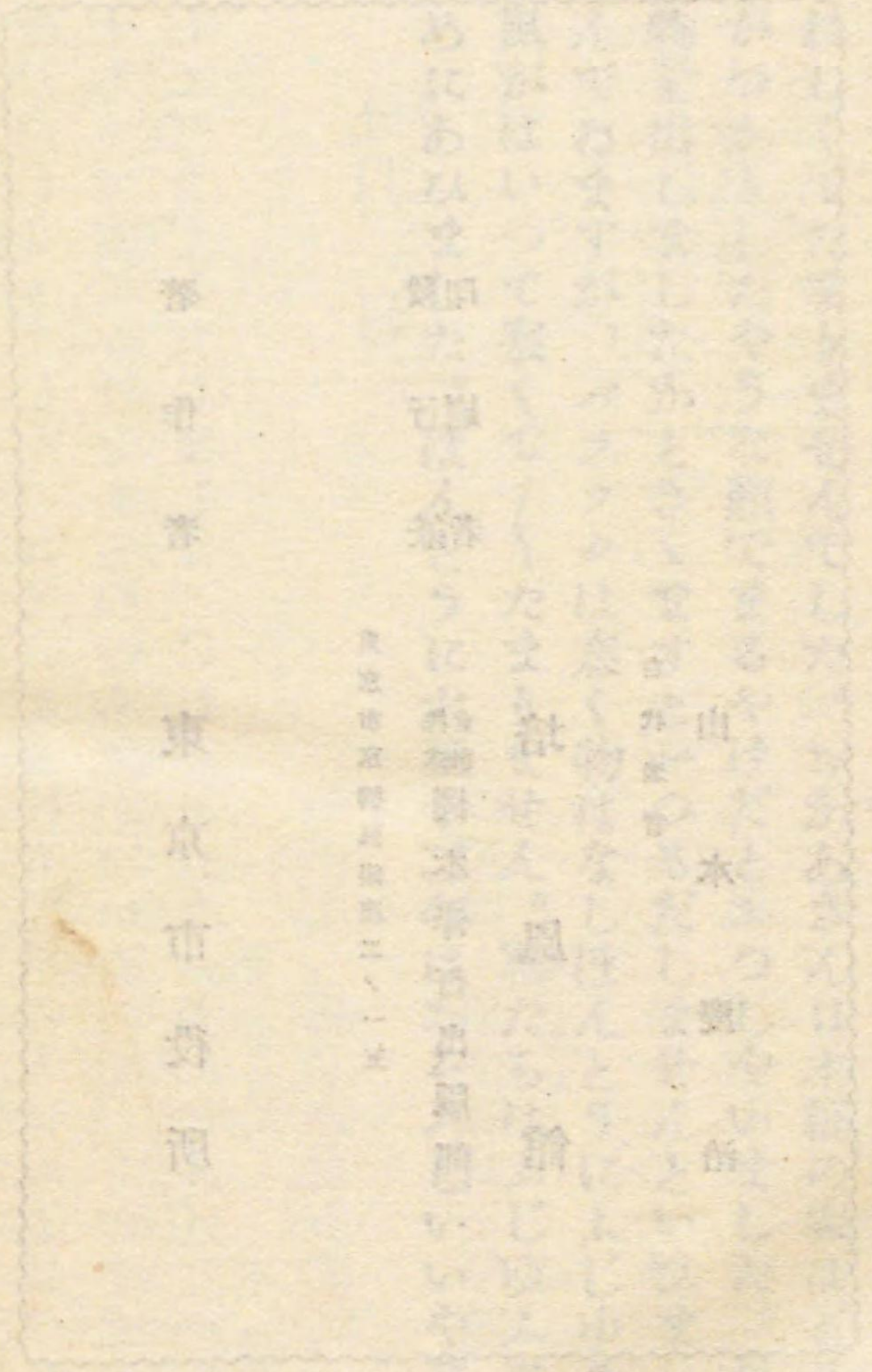
東京市海部

東京市海部

東京市海部

東京市海部

(一) 十 十
(二) 一 廿 廿
(三) 一 廿 廿



東京市海部

288
231

24-7



京東
行發館風培